自己愛的甘えと特性罪悪感および抑うつ傾向との関係

木宮 誠則¹・津川 律子²

(¹ 日本大学大学院文学研究科・² 日本大学文理学部)

キーワード：自己愛的甘え・特性罪悪感・抑うつ

The Relation between Narcissistic “Amae”, Trait Guilt, and Depression

Masanori KIMIYA¹, and Ritsuko TSUGAWA^{2, #}

(¹ Graduate School of literature and social sciences, Nihon Univ. , ² College of humanities and sciences, Nihon Univ.)

Key Words: Narcissistic “Amae”, Trait Guilt, Depression

目 的

土居 (1971, 2001) によれば, 「甘え」には, 健康で素直な甘えと屈折した甘えがあり, 屈折した甘えを持つ人は自己愛的の欠乏状態にあるとし, これを自己愛的甘えとよんだ。そして稲垣 (2007) は, 自己愛的甘えを『『甘え』が満たされず, 甘えたくとも甘えられないがゆえに, 一方的で, 要求がましい自己愛的欲求を伴う『甘え』と定義し, 自己愛的甘え尺度を作成した。原田 (2009) は, 自己愛的甘え尺度が自己愛における誇大性と過敏性の両側面を包括的に捉えることができる尺度であるとし, 「甘え」と自己愛との関連を指摘している。大西 (2007) は, 谷 (2000) の「甘え」尺度を用いて, 「甘え」が特性罪悪感および抑うつに影響を及ぼすことを指摘している。つまり, 自己愛的甘えの強い人は自らの自己愛的な要求によって罪悪感を感じやすく, また, 抑うつ傾向にあることが推察される。健康なパーソナリティを形成する上で, これらの対人関係のあり方を検討する意義は大きいといえる。

本研究では, 特性罪悪感や抑うつとの関連が未だ検討されていない自己愛的甘え尺度を用いることで, 以下の仮説を検討する。1. 自己愛的甘えと特性罪悪感には正の相関を示す。2. 特性罪悪感には抑うつに正の影響を及ぼす。3. 自己愛的甘えは特性罪悪感を介することで抑うつに正の影響を及ぼす。

方 法

大学生 272 名 (男性 127 名, 女性 147 名) を対象に調査を実施した。平均年齢は 19.9 歳であった。調査内容は (i) フェイスシート (ii) 自己愛的甘え尺度 (稲垣, 2007), 「配慮の要求」11 項目, 「許容への過度の期待」12 項目, 「屈折的甘え」9 項目 (iii) 特性罪悪感尺度 (以下 TGS ; 大西, 2008), 「利得過剰の罪悪感」7 項目, 「精神的罪悪感」7 項目, 「屈折的甘えによる罪悪感」6 項目, 「関係維持のための罪悪感」6 項目 (iv) 自己評価式抑うつ性尺度 (以下 SDS ; Zung, 1969 ; 福田・小林, 1973), 20 項目, であった。

結 果

まず, 各尺度の相関結果を出した (Table1)。自己愛的甘え尺度は TGS および SDS と正の相関, 各下位尺度においても一部を除き正の相関を示した。よって仮説 1 は支持された。

Table 1 各尺度の相関結果

	利得過剰	精神的	屈折的甘え	関係維持	TGS	SDS
配慮	.179 **	.261 ***	.217 ***	.209 ***	.285 ***	.161 **
許容	.221 ***	.126 *	.085	.016	.150 *	-.039
屈折	.256 ***	.373 ***	.297 ***	.176 **	.364 ***	.363 ***
自己愛的甘え	.269 ***	.315 ***	.249 ***	.171 **	.332 ***	.363 ***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

続いて SDS を基準変数とする重回帰分析を行った。自己愛的甘え尺度の下位尺度である「屈折的甘え」は正の標準回帰係数 ($r = .375$), 「許容への過度の期待」は負の標準回帰係数 ($r = -.250$) を示した。そして, TGS の下位尺度である「精神

内的罪悪感」は正の標準回帰係数 ($r = .332$) を示した。説明率は 24.2% だった。よって仮説 2 は支持された。

次に, 自己愛的甘え尺度得点別に高群・中群・低群に分け, それぞれの相関結果を出し, 各群別に SDS を基準変数とする重回帰分析を行った (Table2)。分類は, 自己愛的甘え尺度得点の標準偏差 (SD=19.3) に平均値 (39.4) を足した値より上を高群, 引いた値より下を低群, 両群の間を中群とした。

Table 2 SDS を基準変数とした重回帰分析の結果

自己愛的甘え得点別	基準変数				説明率
	許容	屈折	利得過剰	精神的	
高群(59~98, n=43)	-.435 **				.155
中群(20~58, n=182)	-.193 *	.429 ***	-.196 *	.415 ***	.262
低群(4~19, n=47)				.549 ***	.255

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

この結果から, 高群では自己愛的甘え尺度が TGS の SDS への影響を抑制していたため, 仮説 3 とは逆の結果が示された。また, 各群別に分散分析を行ったところ, 自己愛的甘え尺度得点が高いほど TGS, SDS 得点が高くなることが示され, TGS は 0.1% 水準, SDS は 1% 水準で優位差が認められた。

考 察

仮説 1, 2 は支持されたが, 仮説 3 については, 自己愛的甘えが特性罪悪感の抑うつへの影響を抑制するという仮説とは逆の結果が示された。高群は「許容への過度の期待」の得点が高いため, 自らの罪悪感が許容されることを期待し, 抑うつへの影響が抑制される誇大群といえる。対して中群は, 「許容への過度の期待」が高群には劣り, 「屈折的甘え」や「精神的罪悪感」の抑うつへの影響が現れている過敏群といえる。「精神的罪悪感」とは, 精神分析理論で仮定される無意識的な罪悪感であり, 他者との関係の中で自分を積極的に表現することや自ら何かを決めてやろうとすることに対して抱く漠然とした罪悪感である (Erikson, 1959)。ここに, 自己愛的甘えの自己抑制的な特徴が表れていると推察される。低群は自己愛的甘え尺度得点が低いため, 「精神的罪悪感」のみが抑うつへ影響している, 誇大性・過敏性の両低群といえる。

分散分析の結果から, 自己愛的甘え尺度得点が高いほど罪悪感を感じやすく, また抑うつ傾向にあることが示された。しかし, 高群における重回帰分析の結果では, 自己愛的甘え尺度, TGS の両尺度の下位尺度がどれも抑うつへ正の影響を及ぼしていない。これは自己愛人格傾向がストレスに脆弱な素因であることと (小塩, 2005), 自己愛的甘えが自我同一性と負の相関にあること (稲垣, 2007) を考慮すると, 自己愛的甘えの強い人はパーソナリティが不安定であることが推察される。換言すると, 本研究には含まれていない他の因子が抑うつに影響を及ぼしている可能性があるといえる。

今後は, 自己愛的甘えが他にどのようなパーソナリティ特性と関連するのかさらなる検討を重ねる必要がある。